

戦中日記

映画文学人生論

山本周五郎 (19031-61)

『戦中日記』 (1941-45) 「角川春樹事務所」

『愛妻日記』 (19320-41) 「角川春樹事務所」

『青べか日記』 19(28-30) 「大和出版」

『青べか物語』 (1960) 「文藝春秋」

人はいかに生くべきか。世の律によるべきか。己の欲するところを持すべきか

釣りは鯊に始まり、鯊に終わる。私の映画文学人生論は山本周五郎の『青べか物語』に始まり、『青べか日記』、『愛妻日記』を経て、『戦中日記』でひと区切りとしたい。

蒸気河岸の先生が石灰工場の川下で釣りをしていると、一人の男が土堤の上をやってきて、すぐ脇で釣り始めた。場所を変えようとする、男は声をかけた。「人はなんによって生くるか」。

五十年配のその男は、出稼ぎにいらっていた留守に妻と四人の子を一度に失った。名前はささやん。

ささやんにはモデルがいたのだろうか。それとも、蒸気河岸の先生という作者の影だろうか。その謎をつきとめるために私は『青べか日記』『愛妻日記』『戦中日記』を読んだ。

『青べか日記』は昭和三年から昭和五年まで、『愛妻日記』は昭和六年から昭和十六年十二月七日まで、『戦中日記』は昭和十六年十二月八日から昭和二十年二月四日までの日記である。読者に読ませるために書いたものではないが、作者の死後、遺族の承諾の下に、公表された。

『青べか日記』の作者は、末子という女性に失恋し、婦（おんな）を買い、「金がない。金が無い」と訴え、「人生はまことに侘びしく生き甲斐がなく思われる」と嘆き、「生は我々に何を与えてくれるか」と問いかけている。そして、ついに

山本周五郎 戦中日記

戦中日記

映画文学人生論

獺（かわうそ）のように村から逃げ出した。

『愛妻日記』では昭和五年九月、土生清栄が作者の生活の前に現われている。「僕の生活は変わった。出来たら清と結婚したい。清こそ僕の為事を完成するのに必要な女だ」。清栄は小説『日本婦道記』のモデルになった忍従型の女性で、二人の間には四人の子供が生まれた。

『戦中日記』は、「昭和十六年十二月八日。午前一十一時、米、英に対し宣戦布告の大詔下る」という記述ではじまり、昭和二十年二月四日、「ゆだん大敵」終わる、五十七枚」で終わっている。妻子をかかえて書き続ける生活者の記録である。

特に悲痛な記述は昭和十九年六月十八日の嘆きだ。「若しわれらが上に敵弾が来たら、妻子よ、余をゆるせ。来世においてもういちど我らは親子となるであろう、夫婦となるであろう、そのときこそ今生のつぐないをすることを約束しよう」。

昭和二十年二月四日以降の記述はないが、その後は三月十日の大空襲で、長男が行方不明、清栄夫人の病没、敗戦、吉村きんととの再婚と続く。

『青べか物語』のささやんの問いは、『戦中日記』の「人はいかに生きべきか。世の律によるべきか。己の欲するところを持すべきか」（昭和十七年十一月二十四日）に照応する。やはり、ささやんは作者山本周五郎の影だと思う。

寒に入る壕の中なり子の笑い

曲軒